

Green Sketch

グリーンスケッチ

No. 9
AUTUMN 2000

- 随筆 淡路花博
- 植物に親しむ
- 日蘭交流400周年 オランダ見聞記
- 花と緑のイベント情報
- 花と緑のアドバイザー制度
- 緑の愛護団体紹介

特集

「まきどき村」

たね播きから始まる公園づくり



愛媛県新島市都市緑花センター

たね播きから始まる 公園づくり



● 私たちの手で… ●



西田卓司さん
千葉県出身。新潟大学農学部卒業後、まきどき村設立に関わり、現在事務局長として活動中。8月、新団体「里のじむしょ」を設立し(NPO法人申請中)新潟市内でも活動の場を広げようと奮起している。

「まきどき村」を設立しようという始まりは何ですか

一番根底にあるものが、中学の頃瀬戸大橋が開通し、その時の大手建設会社CM「地図に残る仕事」という言葉ですね。その言葉に「夢がある仕事だな、将来そんな仕事がしてみたいな」という思いをもったことがその後大きな影響を与えていると思います。その後高校生の時に「沙漠緑化に命を賭けて」という本に出会い、この「沙漠の緑化こそ「地図に残る仕事」ではないか」と思い、大学へ行って勉強しようと決心しました。

その後どのような変化があったのですか

大学入学当初は、環境保全型農業に興味を持ち勉強していましたが、頭で考えるだけでなく実践しなければと思い、3年生の時に有機農業研究会・STEPというサークルを作りました。そこでは生ゴミを処理したものを堆肥として野菜など作っていました。その時に初めてサツマイモを作ったのですが、そのサツマイ

今回は読者の方から情報を頂いた、西浦原郡巻町の「まきどき村」という体験型農園付公園を取材しました。そこではまきどき村の趣旨に賛同する人々が集まり、自分たちの手で企画から作業まで全てを行いながら公園づくりを進めていました。なぜそのような公園づくりが始まったのか、そしてまきどき村とはどのようなところなのか、発起人の一人であるまきどき村事務局長の西田卓司さんにお話を伺いました。

その苗はこれで育つのだろうかと思うほど細々したもので、しかも大学の畑は砂地で殆ど保水性がなく、朝に水をやって夕方にはしおれそうな状態で、もう必死に水やりをしました。その苗が2枚3枚と葉をつけ始め、そのうち畑を覆うほどの葉を上げられたんです。秋になり掘り上げてみると立派なサツマイモが出来ていたんですね。魔法かと思うほどの驚きと、感動がありました。同時に幼い頃体験したイモ掘りが体験だったのだろうと思いました。イモを掘るだけの体験では私の中には特別何も印象に残っていません。苗を植え育てていく過程を見てこそイモ掘り体験であり、そういう過程を多くの人に体験してもらいたいと強く思いました。

それが「まきどき村」設立の大きなきっかけとなったのですか

そうですね。そういったことを体験してもらいたいというのがまきどき村設立の最大の理由です。種まきから収穫までを体験し、その命に触れ野菜本来の姿を見ることに価値があり、それをどう感じるかはその人次第。ただその体験できる

場を作りたいという気持ちから始まりました。

「まきどき村」はどのような形で始まったのですか

まずは、どこにまきどき村をつくるかという場所の問題があったのですが、現在の場所が手つかずに眠っていて、どんな利用をしようか検討中であることを知りました。その付近は温泉あり、地ビールあり、山あり、トイレも近くにあるとても恵まれた場所だったんですね。そこでただの体験農園ではなく、畑付公園づくり「まきどき村」として位置付けようと考えました。実際に植付けから体験することだけでなく、近くを訪れた人が気軽にベンチに座って野菜の本来の姿を見られる、そんな体験ができる公園です。

どのような苦労がありましたか

その場所は、ただ土地があるというだけで荒地そのものでした。始めは知り合いに手紙で呼び掛け、まきどき村の趣旨に賛同してくれた人たちで荒地の開墾作業が始まりました。



開墾作業は大変でした

した。スコップやつるはしを使った手作業の公園づくりでした。

企画段階では、会費制で会員を募集することにに対し、お金を払って草刈する人がどこにいるんだという考えも多く、理解を得るにも一苦労でした。

新潟日報やテレビの取材を何度か受けました。すぐに参加してくれた方がいて、その方は毎週のように参加されています。それでも一気に会員は集まるものではありませんでした。その後参加者の口コミやHPを開設した影響も少しはあったのか、県外からも少しずつですが会員に加わる人が増え、1年前25人だった会員が、現在は70人にまで増加しました。



開墾作業のメンバーです

まきどき村の活動を具体的に教えてください

月1回のミーティングで今後のスケジュールやイベントなどを決めますが、日程は毎月発行しているイベント情報で事前にお知らせし、都合がつく人が出席し



田んぼ型ビオトープ

て企画づくりに参加します。広報宣伝部、農園管理部、会報担当、などの役割分担があり、年4回会報を発行しています。

昨年は開村後、失敗しながらも看板を作ったり、炭焼きを行ったり、当然ジャガイモやサツマイモ等野菜作りもしました。今年は田んぼ型ビオトープ作りや竹を使った花壇整備を行いました。近くのかやぶきの家で地元の方との交流会や収穫感謝祭なんかも開きます。そんな試行錯誤を繰り返しながら体験をすることがまきどき村の活動でもあります。

「まきどき村」が目指すところは、何ですか

昨年の夏のことですが、神奈川県から体験したいとやってきた人と話しさながら竹炭用の竹割作業を行っていました。そんな姿を見た地元のおばあちゃんが「何してんだね」と話かけてきて、「竹炭用の

竹を割っているんです」と三言三言話をしたその後、おばあちゃんが自分の畑のトマトやスイカをもってきてくれました。ちよと疲れてきた頃だったので休憩して、頂こうということになったのですが、そのトマトを食べた瞬間言葉にできないほどの良い雰囲気を感じたんですね。その時まで、まきどき村の目的は体験する



とか命にふれるとか、野菜の本来の姿を見るためなどと言っていました。そんなことよすが、そんなことよりこの地域の人の温かさ、故郷を感じる瞬間を得るためにまきどき村を始めたのだと強く確信しました。それ以来公園づくりという考えから故郷づくりへと目的が変わりました。その後、地元のおじ

いちゃんに協力してもらった炭焼き作業の時の雰囲気や地元のおばあちゃんとのいろりを囲んでの交流会の時なども故郷を感じた一瞬でした。そんな温かい故郷を感じることを最大の目的です。

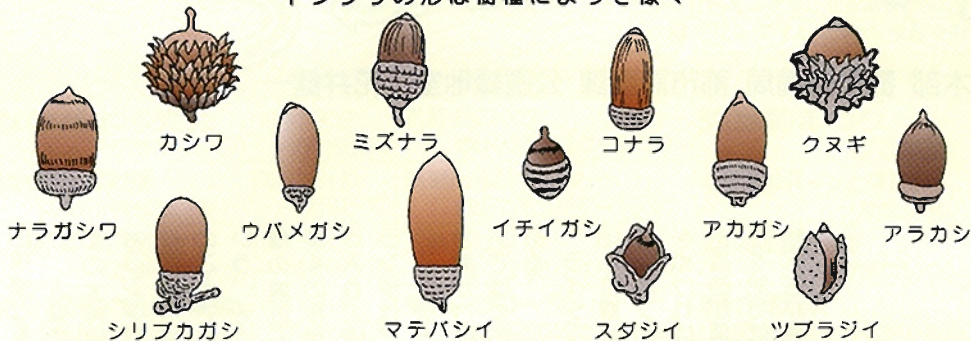
まきどき村の現在は、日曜の朝の作業を終えた後、朝市が行われる場所まで持参のおにぎりや朝市のおばあちゃんから頂くついでに朝食を食べる。そしておばあちゃんと話をしながらゆったり流れる時間を過ごすことが一番の宝物です。こんなことができるのはこのまきどき村だけだと思います。そしてそのような雰囲気、雰囲気を感じる場所をもっともつと創りたい。そんな思いを込めて世の中に蒔いた一粒の種、それがまきどき村なのです。きつとつが「播き時」(まきどき)です。

このまきどき村の活動は、他人との関わりや自然の生命を目の当たりにするという、現代には不足がちな何か大切なものに気づかせてくれそうです。

植物に親しむ

実りの秋・木の実の色々な効用を知ろう!!

ドングリの形は樹種によって様々



秋も深まると、鳥やリス達は色々な木の実を集めて食料の少ない、冬に向けて蓄え始めます。昔は、人間もまた木の実やドングリを食料としていました。土器はドングリのあくを抜く為に発明されたとも言われています。今日でも木の実はいろいろな形で利用されていますが、その一部を今回は紹介したいと思います。

美しい木の実の色

庭先にヒラカンサやナナカマド、マンリヨウやナンテンなどを植えている家庭をよく見かけます。これらの樹木は鮮やかな赤い実をたくさんつけます。その赤い実の美しさを自分の庭で観賞するだけでなく、赤い実を食べにやってくるかわいい鳥たちを観察することも出来ます。



真っ赤に熟したナナカマドの木

木の実から油がとれる

新潟県の木は「ユキツバキ」であることから県内では、榎の花はとも親しまれています。この榎の実から油がとれるのを知っていますか？榎の実からとれる「榎油」は黄みの強い色合いで特有の香りがあり、昔から整髪用や化粧用として、また食用油としても利用されています。



ヤブツバキの実

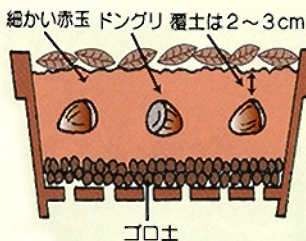
おいしい木の実

秋の味覚として食されている木の実もあります。銀杏やくるみなどはよく知られていますが、その他

ふえ

木の実を播いて育てみよう

木の実には鳥が食べ、フンをした場所から発芽をしたり、樹木から落下し、落ち葉に埋もれた実から、芽を出したりします。あなたの庭にもドングリや木の実を播いて育ててみませんか。



- ※どんぐりは、取ってきたら、すぐ播きましょう。(拾った時に、カラカラ音がするのは芽がでません)
- ※鉢は戸外に置き寒さにあてましょう
- ※土はあまり乾燥させないようにしましょう



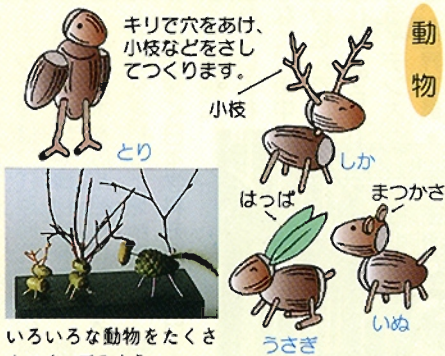
①どんぐりを少しななめにけずりおとします。



②先がとがつたものでどんぐりのなかみをほじりだす。

③口にあてて空気をふきましょ。ピンなどをふいたときとおんなじけりです。

動物



いろいろな動物をたくさんつくってみよう

こま



色を塗ってカラフルに...